

国立大学における「不本意入学」の実態 ——入試形態・ジェンダー・学部・大学階層に着目して——

小林 元気
鹿児島大学

1. 本研究の目的

近年の大学進学率は50%を超過するユニバーサル段階にあり、誰しものが望めば大学に入学できる状況が到来している一方で、学生が自身の希望通りではない大学に不本意ながら進学する「不本意入学」の問題が存在する。「不本意入学」に関しては、特定大学を事例とした先行研究に一定の蓄積が見られる一方で、全国的な実態把握という巨視的な視点からの実証的検討はこれまでほとんど行われていない。本研究は、ランダムサンプリングによる全国調査の個票データを用いて、国立大学というカテゴリーにおける「不本意入学」の分布とその特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究と「不本意入学」の定義

国立大学の不本意入学を検討した主な先行研究として、神戸大学の学部生272名を調査した近田(2016)、九州地方の国立H大学1年生2,798名を調査した竹内(2020)が挙げられる。両者はそれぞれに興味深い知見を得ているが、1大学内で実施された調査ゆえに、全都道府県に立地する国立大学というカテゴリー内で不本意入学がどのように分布しているのか、という本研究の課題は明らかにされていない。

なお、「不本意入学」の定義に関しては、各論者で諸説が分かれている。本研究では、近田(2016)の整理における「狭義の不本意入学」——入学した大学が第一志望ではないこと——を「不本意入学」と位置づけ、国立大学においてそのような不本意な進学状況がどのような諸条件に規定されるのかを探索的に検討する。

3. 使用データ

本研究で使用するのは、全国大学生生活協同組合連合会が2018年10月～11月に実施した「第

54回学生の消費生活に関する実態調査」の個票データ¹⁾である。調査対象は大学生協を設置する日本全国の大学からランダムサンプリングで抽出され、郵送留め置き法で行われた結果、70大学生協の学部生19,593人の回答が得られている(回収率35.2%)。このうち、国立大学在學生にサンプルを限定し、分析に用いる変数に欠損値のあるケースに対してリストワイズ削除を行い、最終的に残った8,831ケースを分析対象とする。

4. 変数設定

従属変数となる不本意入学に関しては、「今の大学は第一志望ですか」の質問項目を用いる。

独立変数として、第一に、「一般入試」及び「推薦・AO入試(一般公募推薦、指定校推薦、自己推薦、AO入試)」の違いが志望度にどのように影響するのかを分析する。明確な目的意識を持つ生徒を早期に選抜するという推薦・AO入試の趣旨から、当然これらを経て入学した学生の方が志望度が高いことが見込まれる。

第二に、ジェンダー変数を設定する。保護者が子の進学先を検討する上で重視する項目を調べた調査(全国高等学校PTA連合会・リクルート2018:45)において、「自宅から通えること」に関して子の性別で大きな開きがあった(男子18.6%、女子31.0%)ことから、女子の親ほど自宅から通学できる距離の大学への進学を求めるゆえに、子が第一志望ではない大学を選ぶ可能性が高まると考えられるからである。

第三に、所属学部(文系、理系、医歯薬系)に関する変数の影響を検証する。なぜならば、理系や医歯薬系の学部では、文系と比較して相対的に高い「職業的レリバンス」(本田2004:125)——将来の職業達成との関連において直接的に役立つ知識やスキルの獲得——が見込まれ

るため、他の変数とは別の次元で第一志望の学生が多くなることが予想されるからである。

第四に、国立大学というカテゴリー内部での大学階層の違いによる影響を検討する。日本全国に分布する国立大学の内実はすべてが均質であるわけではなく、資源配分や研究活動に大学間格差が存在することはかねてから指摘されてきた(吉田 2003; 天野 2008)。これらの格差は、大学のもつ社会的威信や入試難易度の格差構造とも通底しており、ゆえに高校生の大学志望度にも影響を与える可能性がある。本研究では、国立大学を3つの階層グループに分類した長谷川・内田(2014)を参照し、大規模・総合型の大学で構成される大学階層A群、中間的なB群、小規模・単科型のC群に分類した上で、大学階層の異なりが志望度に及ぼす影響を検討する。

5. 分析結果と考察

従属変数の「第一志望/第二志望以下」と、4つの独立変数(入試形態、性別、所属学部、大学階層)のそれぞれについてクロス分析を行った結果を表1~表4に示す。なお、いずれの分析においても有意確率は0.000であるが、これは8,831というサンプルサイズの大きさを考えると当然のことであるため、変数間の関連の強さを判断する指標としてクラメールのV係数に着目しながら分析を進めたい。(2)

表1から、一般入試入学者の不本意入学の割合が40.3%に達していることに対して、推薦・AO入試入学者は7.9%に留まっており、入試方式の違いが不本意入学者の発生に一定の影響を与えていることがわかる(V係数=0.231)。

表2では、男女間で不本意入学者の発生状況に大きな差はみられず、効果量もほとんどない(V係数=0.048)。予想に反して、国立大学の不本意入学状況にジェンダー要因による性別の偏りはほとんど観察されなかった。

続いて表3を見てみると、こちらも予想に反して不本意入学の発生状況は「文科系・医歯薬系<理科系」の構図が見られる。一方で、効果量は大きくはない(V係数=0.091)。理系学部には主に理学部や工学部等が含まれるが、これら

の学部は地方も含めて多くの国立大学が設置していることから、受験生にとって入試難易度の序列構造を想起しやすく、結果的に第二志望以下での入学者が多くなっているのかもしれない。

最後に表4を検討すると、A群では21.5%に留まっていた不本意入学がB群では46.8%へと倍以上に増えており、C群は40.8%とB群よりも少ない状況にある。これらの差には、一定の効果量が観察される(V係数=0.236)。国立大学のうち最も不本意入学が発生しやすいのは、主に地方に立地する中間的規模の国立総合大学であることが読み取れる。

表1 入試形態×志望度

| | 第二志望 以下 | 第一志望 | 合計 |
|---|--------------|--------------|-------------|
| 一般入試 | 3071 (40.3%) | 4557 (59.7%) | 7628 (100%) |
| 推薦・AO入試 | 95 (7.9%) | 1108 (92.1%) | 1203 (100%) |
| 合計 | 3166 (35.9%) | 5665 (64.1%) | 8831 (100%) |
| カイ二乗値 473.220 自由度1 有意確率 0.000 V係数 0.231 | | | |

表2 性別×志望度

| | 第二志望 以下 | 第一志望 | 合計 |
|--|--------------|--------------|-------------|
| 男性 | 1917 (37.8%) | 3148 (62.2%) | 5065 (100%) |
| 女性 | 1249 (33.2%) | 2517 (66.8%) | 3766 (100%) |
| 合計 | 3166 (35.9%) | 5665 (64.1%) | 8831 (100%) |
| カイ二乗値 20.596 自由度1 有意確率 0.000 V係数 0.048 | | | |

表3 所属学部×志望度

| | 第二志望 以下 | 第一志望 | 合計 |
|--|--------------|--------------|-------------|
| 文科系 | 1034 (31.5%) | 2244 (68.5%) | 3278 (100%) |
| 理科系 | 1757 (40.2%) | 2609 (59.8%) | 4366 (100%) |
| 医歯薬系 | 375 (31.6%) | 812 (68.4%) | 1187 (100%) |
| 合計 | 3166 (35.9%) | 5665 (64.1%) | 8831 (100%) |
| カイ二乗値 72.422 自由度2 有意確率 0.000 V係数 0.091 | | | |

表4 大学階層×志望度

| | 第二志望 以下 | 第一志望 | 合計 |
|---|--------------|--------------|-------------|
| 大学階層A群 | 715 (21.5%) | 2603 (78.5%) | 3318 (100%) |
| 大学階層B群 | 1591 (46.8%) | 1812 (53.2%) | 3403 (100%) |
| 大学階層C群 | 860 (40.8%) | 1250 (59.2%) | 2110 (100%) |
| 合計 | 3166 (35.9%) | 5665 (64.1%) | 8831 (100%) |
| カイ二乗値 493.058 自由度2 有意確率 0.000 V係数 0.236 | | | |

以上を総合すると、不本意入学を規定する要因として、特に「入試形態」と「大学階層」の影響が大きいことが明らかにされた。では、これらの要因と大学入試における志望度の違いによって、志望理由の詳細はどのように異なってくるのだろうか。この問いを明らかにするために、「今の大学を選んだ主な理由をお選びください。(2 つまで)」の項目を用いた入学動機分析を行う。

はじめに、入試形態と志望度の組み合わせにより、サンプルを「推薦・AO×第一志望群」「推薦・AO×第二志望以下群」「一般入試×第一志望群」「一般入試×第二志望以下群」の4つのグループに分類し、グループごとに志望理由の各項目を選択した割合を図1にグラフ化した。

グループ間でのばらつきが大きい項目として、まず「①学びたい分野があった」が挙げられる。突出して高いのが「推薦・AO×第一志望群」(65.2%)であり、「一般入試×第一志望群」(48.9%)、「推薦・AO×第二志望以下群」(45.3%)、「一般入試×第二志望以下群」(38.2%)と並ぶ。このことから、推薦・AO入試が、入学後の学びに関して具体的な見通しを

持っている生徒の選抜にある程度成功している一方で、推薦・AO入試であっても第一志望ではない不本意入学者はそのような目的意識が低いことがうかがえる。

続いて、「②自分の学力に合っている」「⑧ここしか受からなかった」でも明確な傾向が読み取れるが、これは筆記試験により数値化される学力を直接的に求められる一般入試の特徴、および第二志望以下の大学に入学することになった理由として、自然な結果であろう。

もう一点留意すべきは、「⑨家族・知人・先生のすすめ」を選択した割合において、「推薦・AO×第二志望以下群」が最も高い(24.2%)ことである。二番目に高いのも「推薦・AO×第一志望群」(15.7%)であることから、推薦・AO入試での入学者は、進学決定に際して周囲の他者による助言の影響を受けやすいことがわかる。一方で、第二志望以下の不本意入学者においてその割合が最も高いという分析結果は、生徒に主体性を求めるAO・推薦入試の趣旨とは矛盾して他律的な意思決定を行った学生が存在することを示唆している。

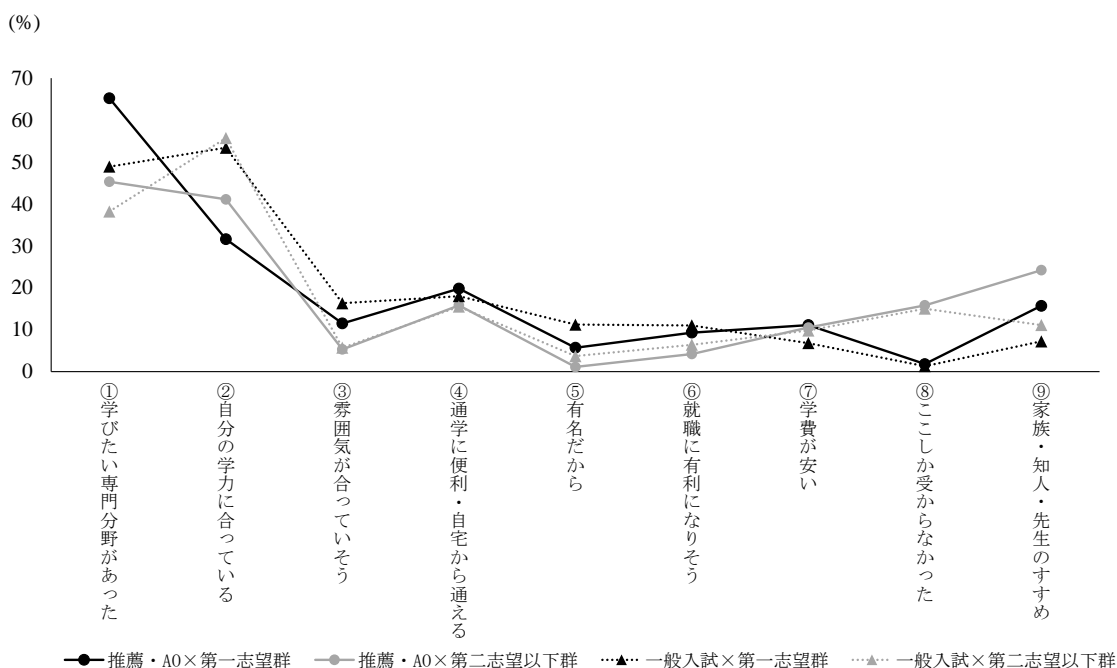


図1 志望理由(入試形態×志望度の4群別)

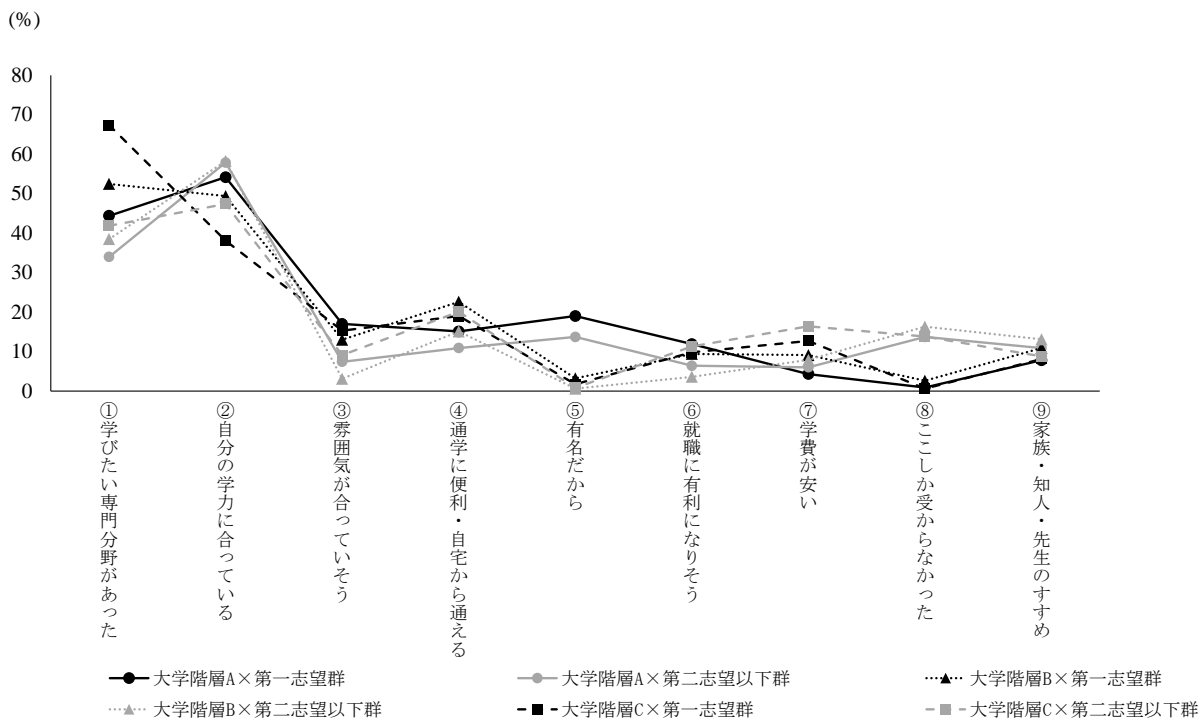


図2 志望理由（大学階層×志望度の6群別）

次に、大学階層と志望度の組み合わせにより、サンプルを「大学階層 A×第一志望群」「大学階層 A×第二志望以下群」「大学階層 B×第一志望群」「大学階層 B×第二志望以下群」「大学階層 C×第一志望群」「大学階層 C×第二志望以下群」の6つのグループに分類し、グループごとに志望理由の各項目を選択した割合を図2にグラフ化した。

同様にばらつき大きい項目を見ていこう。「①学びたい専門分野があった」では、「大学階層 C×第一志望群」が突出して高く(67.4%)、「大学階層 B×第一志望群」(52.5%)、「大学階層 A×第一志望群」(44.4%)と続いている。旧帝大を上層とする大学階層のヒエラルキーとは真逆の結果になっている点に興味深い。地方の小規模・単科型大学で構成される大学階層 C が明確な学習目的を持つ学生を多く集めている一方で、入学するために高い学力を要する旧帝大を中心とした大学階層 A 群には、入学時点で学びたい専門分野を持たない学生が多く存在することが示唆されている。

では、大学階層 A の大学を志望する学生にはどのような動機が存在するのか。「⑤有名だから」

の項目を見てみると、「大学階層 A×第一志望群」(19.0%)、「大学階層 A×第二志望以下群」(13.7%)の選択率に対して、大学階層 B・大学階層 C の学生はほとんど本項目を選択していない。すなわち、大学階層 A の学生は、「学びたい専門分野」とトレードオフで、進学先が有名であるという社会的威信にアドバンテージを見出している可能性が高いことが推察されるのである。

6. まとめ

本研究により、国立大学における不本意入学に関して新たに得られた知見は以下の通りである。

- 一般入試は、推薦・AO入試と比較して、より多くの不本意入学を発生させている。
- 中間的規模の総合型大学において不本意入学が生じやすく、小規模単科型大学、大規模総合型大学の順に少なくなってゆく。
- ジェンダーや所属学部は、不本意入学の発生にほとんど関連していない。
- 推薦・AO入試で第一志望の大学に進学した学生は、志望動機として学びたい専門分野の存

在を挙げる割合が高く、学習意欲が高いと推察される。

- ・推薦・AO入試であっても不本意入学の場合は、志望動機として学びたい専門分野の存在を挙げる割合が下がり、家族・知人・先生の勧めにより志望する者の割合が高くなるなど、必ずしも主体的な学生ばかりを集められているわけではない。
- ・小規模・単科型大学の学生は志望動機として学びたい専門分野の存在を挙げる割合が高く、学習意欲が高いことが推察される。その割合は、中間規模総合大学、大規模・総合大学の順に低くなっていく。
- ・大規模・総合型大学の学生は、進学動機において「学びたい専門分野」を欠く半面、進学先が有名であるという社会的威信に価値を見出す傾向にある。

〔注〕

- (1)二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「第54回学生生活実態調査, 2018」(全国大学生生活協同組合連合会)の個票データの提供を受けた。
- (2)クラメールのV係数による効果量の評価に関して、水本・竹内(2008: 62)を参照した。

〔引用文献〕

- 天野郁夫(2008)『国立大学・法人化の行方——自立と格差のはざままで』東信堂。
- 島一則(2006)「法人化後の国立大学の類型化——基本財務指標に基づく吉田類型の再考」『大学財務経営研究』3: 61-85。
- 全国高等学校PTA連合会・リクルート(2018)『第8回高校生と保護者の進路に関する意識調査2017年報告書』。
- 近田政博(2016)「高学力層の大学新生が抱える不本意感と違和感——神戸大学での調査結果から——」山内乾史・武寛子編『学修支援と高等教育の質保証Ⅱ』学文社, 11-46。
- 竹内正興(2020)「現代の大学における不本意入学者」佛教大学大学院教育学研究科博士論文。

長谷川哲也・内田良(2014)「知の格差——電子化時代の大学図書館における図書資料費の変動——」『教育社会学研究』94: 259-280。

本田由紀(2004)「教育システムと職業システムとの関係における日本的特徴に関する研究: トランジションとレリバンスの比較歴史社会学」東京大学大学院教育学研究科博士論文。

水本篤・竹内理(2008)「研究論文における効果量の報告のために——基礎的概念と注意点——」『英語教育研究』31: 57-66。

吉田香奈(2003)「国立大学予算の配分システム——米・英の経験と日本への応用——」『国立学校財務センター研究報告』。

高等教育におけるコンTEMPLATIVE実践の導入に関する研究 -卒業研究を通しての学生の気づきを中心に-

加納友子 藤田美紗都
(立命館大学) (立命館大学大学院生)

1. 本研究の目的

筆者らが所属する立命館大学教育人間学専攻では、マインドフルネス、瞑想、ヨーガなどのコンTEMPLATIVE実践をおこなう実習と、コンTEMPLATIVE的観点を踏まえた講義をカリキュラムの一部に導入している。

その中でも、4年次の一部のゼミナールにおいて、学生は、過年度に学んだマインドフルな洞察方法を用いて卒業研究をおこなっている。本研究では、学生の卒業論文執筆中の内面の変容を検討し、高等教育におけるコンTEMPLATIVE教育実践の意義について、それに関わる三つの観点から明示することを目的とする。

2. コンTEMPLATIVE教育とは何か

コンTEMPLATIVE教育は、「学生の気づき、学びへの動機付け、さらに一般的には人生の自由と超越につながる形を育成する一連の実践」と定義されている (Roeser & Peck, 2009, p. 119)。具体的には、瞑想、マインドフルネス、ヨーガなどのコンTEMPLATIVE実践を導入した教育システムのことであり、その目的は、実践者がアウェアネスを高めると同時に、智慧や慈悲などの特性を体験的に開花させることである。

また、その特徴としては、①内面の「気づき」と「体験」が重視されている点、②人間の外面的な行動よりもむしろその行動を生み出している心（意識）にダイレクトにアプローチする点、③実践者（学生と教師）のマインドフルな態度および意識体験の共有が重視される点などが挙げられる（加納・久野・藤田，2020）。

3. 教育人間学専攻におけるコンTEMPLATIVE教育の導入について

前述のとおり、当該専攻では、コンTEMPLATIVE実践とそれに関する授業科目を2001年の専攻設置当初から導入している（本専攻はコンTEMPLATIVE教育を専門とするものではないため、それ以外の科目も多数開講している）。これらの授業での目的は、①文献講読を通して「思考の限界」に気づくこと、②統合的視点の理論的学習、③実習を通してのマインドフルな意識の習得、④コンTEMPLATIVE実践を活かした実存的課題の解決の4つに大別できる。専攻では7人の教員が担当するゼミナールのうちの二つのクラスで、卒業研究の方法にコンTEMPLATIVE実践を応用しており、④がそれにあたる。本稿ではこの卒業研究の取り組みに焦点化して検討する。

4. 卒業論文での取り組み

専攻のゼミナールでは、学生の学術的関心に応じて、教育や人間に関する研究テーマを比較的自由に設定することができる。

筆者（加納）の担当するゼミナールでは、卒業研究指導の際に、教員と学生が内面の意識の変容に注目しながら対話をおこなうようにしている。ここでの研究指導は、論理的に考察を深める作業というよりは、むしろ「マインドフルな意識に留まりつつ、コンTEMPLATIVEな洞察によって、リサーチ・クエスチョンに対する答えを導き出すプロセス」とであると換言できる。

選択される研究テーマには、学校現場における具体的な教育的課題や、青年期の人格形成に関するもの、人間関係の課題に関するものなど多岐にわたるが、指導の際、

少なくとも教員の側は、そのような意識をキープしつつ学生と対話をおこなうようにしている。具体的には、学生の現前の課題について教員が問いかけ、学生はそれに応えるということを相互に繰り返すのであるが、このように対話のある時点で、論理的応答不可能な問いに直面した際、学生の意識がそれまでの二項対立的（二元論的）な観点から、ある意味距離が置かれる瞬間が生じる。そして、その移行した意識において、当初は発想され得なかった課題への応答が得られる場合がある。

次節では、そのような対話により学生の二元論的意識がそこから離れた意識へと移行し、その到達した意識状態で課題への新たな答えが見出された例を紹介する。これによって、コンテンプラティブ教育による学生の内面の変容プロセスを検討する。

5. 【事例】二元論的見解からの解放と自分らしい生き方の発見

ここで取り上げるのは、中学生時代から疑問を抱いてきた教育的課題を卒業研究のテーマに設定し、熱心に研究を積み重ねてきた学生の例である。この学生の場合は、卒業研究指導の対話中に生じた意識の変容が、課題の答えを導き出す突破口となった（加納・福原・川崎，2020）。

本学生の研究テーマは「自己肯定感」と「いかに人は『自分らしく』生きられるか」を問うものであり、『自己否定感』を『自己肯定感』に置き換えることで、人は自分らしく生きられるようになる」というものが、この学生の当初の自説であった。しかし、研究を進めるにしたがい、その結論に疑問を持ち始めだしていた。

そのようなタイミングでおこなわれたマインドフルな対話を通して「肯定 vs 否定」、「良し vs 悪し」という二元論を生み出している主体（思考）そのものに「その意識の外から気づく」という体験が生じた。その気づきが生じた瞬間、問題を問題たらし

めているのは自分自身の思考であり、その思考に同一視していることが「生きづらさ」の根本的原因であることを把握する体験が生じた。つまり、生きづらさの根源は「自己肯定感を抱かなければならない」「自信を持たねばならない」「自分らしく生きねばならない」と駆り立てる自分自身であり、その本質は自らの「思考」であること、また、その主体を手放しても存在する「我」こそが本来の「我」であるという認識に至ったと理解できるであろうか。

この学生は、その時の体験を次のように記述している。

筆者はこの日、自分らしく生きる方法を模索する中で一番大切にしてきた、自己肯定感・自己否定感という概念自体につまずきを感じていることを打ち明けた。

それに対し、指導教員は「いいとか、わるいとかそれをすべてとっぱらってみたらどうなるのかな」と疑問を述べた。この言葉を聞いた瞬間、筆者自身が驚き戦いた（原文ママ）くらい突然に、今まで感じていた違和感や悩み、苦しみが一瞬にして消えた。その感覚というのは、筆者が今まで体験したことのある感覚では表現しがたい。だが、ぱっと頭の中が開けたような、真っ白な光が筆者自身の中から放たれたような感覚であった。何とも言い難い曇り空のような心が一瞬にして開けた瞬間であった。

それまでの自我機能と自我構造が瞬間的・一時的に変容した結果、新たな認識と世界観が目前に拓かれたという印象である。

専攻の学生は1年次にクリシュナムルティの『学校の手紙』を講読するが、学生にとっては、文献講読で触れた意識現象を、実際に体験する瞬間であったといえる。

自我意識を生み出す主体（思考）への「気づき」は、二元論的見解からの「解放」を

生じさせる。思考を徹見する時、過去も未来も「現在」の思考が生み出す幻影に過ぎないことが直観視される。

そこで筆者は、自分らしく生きるためには、自己肯定感・自己否定感の壁を壊すことが大切ではないかと考えるようになった。なぜなら、筆者自身が二元論で考えていたこと、つまり、今まで脱したいと思っていた社会によって作られた枠組みの中には、現代社会のシステムに囚われないことを前提とした問いである「どのような状況であっても自分らしく生きるには何が必要か」の答えに辿り着くことができないと考えるからである。

この学生の卒業論文の問いへの応答は「自己肯定感を育てること」から一変することとなった。捉われのない心で生きる術を学び始めた、というのが指導教員としての筆者の学生に対する印象である。

このことから筆者は、良いところ悪いところというような面で見つめることや、自分が他者より優れていると安心感を持つことより大切なのは、どのような自分も丸ごと受け入れることであると考え、「これが私である」とありのままを受け入れながらも総じて考えることで、どんな困難が待ち受けているとも、「私なら」どうすればよいかという考え方ができるのではないだろうか。

「間違いのない人生を送りたい」という当初の願いが、「失敗も後悔もあるのが人生である」という考え方へと変化し、かつて抱いていた人生の失敗に対する恐怖は、自然とリリースされていった。

筆者にとっての「自分らしく生きるに

は」の答えは、自分の限界を作らず、自分自身に素直で誠実なありのままの自分でい続けることである。我々人間が生きる現代は、社会そのものが競争で溢れている。他者に言われた一言だけでなく、無意識に自分自身で作り出した枠組みや評価により自身を否定してしまう恐れがある。だからこそ、その流れに流されず生きていくために、どのような自分も受け入れ自分に誠実に生きることが大切であると考えた。

「自分に誠実に生きる」という人生の「処方箋」は、非常にありふれた表現であり、多くの啓蒙書で語られ尽くされている印象がある。しかし、悩み苦しんでいた学生が、葛藤状況そのものから飛躍的に脱却し、自分なりに人生の奥義を確信を持って言語化できるようになることは、啓蒙書に綴られた処世術を知的に理解することとも、またそこに書かれたノウハウを元に行動を律することとも、本質的に異なるものである。

この事例における学習・研究への取り組みのプロセスを、学生の考察も含めた上で時系列で示すと次のようになる。

- ①「幸せになるために」「他者と共存するために」、卒業研究を通して明らかにしたい課題があった。
- ②そのために、自分なりに大学で学びを深めてきたが、確信ある答えをまだ得ることができていなかった。
- ③その課題を卒業論文のテーマに選択した。
- ④卒業研究指導の対話の中で、二元論的意識からの飛躍が生じた。
- ⑤課題を課題だと認識していた意識（課題に囚われていた自我＝思考）が客観視され、相対化された。
- ⑥心の捉われから解放される体験が生じた（ノウハウや知識で解決するのではなく、課題から自由になれることを知る）。
- ⑦捉われから解放された心で生きること

価値を置くようになった(生きる姿勢の転換)。

- ⑧未来に恐怖する己に気づき、それを対象化することにより恐怖が消去された。
- ⑨人生には、いわゆる「正解」があるのではないことを体験的に認識し、自分らしく生きることに価値を置くようになった。

この一連のプロセスは、知的理解に基づき進展したというよりは、むしろ学生自身が内面に「誠実に」したがうことにより自然に展開したものであったように思われる。

6. コンテンプラティブ教育を卒業研究に導入する意義について

Palmer (1983) は、今日の教育の多くを支配する「客観主義」的認識論が、人の見方とあり様を歪めているとして、コンテンプラティブ教育をその突破口として位置づけている。

人間はある意識「状態」にある時、自己尊重、他者尊重、生命への畏敬、自分＝世界であること、人間はあるがままでいて良いのだということといった独特の「感覚」を体験することがある。そのような体験は、本人にとって、人生における尊い体験だと認識され、そこから新たな人生観が創出されることが多いように思われる。前節では人間と教育に関する問いに対して、コンテンプラティブにアプローチした事例を示したが、このような論文における考察や結論は、自らの体験を言語化し概念化するプロセスによって導き出されるものであった。

別のある学生は、大学在学中、奈良の大仏に対峙した際に印象深い意識変容を体験した。その体験を「湧出」と命名し、それを次のように説明している。

その自他の区別のないどこまでも続く
更地の中で、新たに「自己」が生まれる。
これを自己の「湧出」と呼ぶ。解放され

広がった自己を収斂するようなものである。解放で得た感覚は、「私は有限である」ということを捉えさせるものとなり、それを自覚した上で「自己」の存在位置を改めて実感する。存在する全ての生命や物の中の「自己」である、というように他者の存在をより強く感じられるため、周囲は多くの生命で溢れているような感覚がある。そのため、自己の「湧出」は包み込まれるようなものであった。「再構築」というように新たな「自己」の枠を作り出すということとは意味が少し異なる。ゆえに、「湧出」という言葉を用いた。この言葉選びは、日本文化の中で生きる筆者によるものである。「湧出」というと温泉などの液体の様子が想像されるように、地から湧きおこり気体としても広がっていくようなイメージをこの言葉に持っているのだろう。しかし、この外界との境を曖昧にするような表現は、「自己」を曖昧なものにするという意味ではない。新しく湧きおこる「自己」は、液体の泉源のように湧きおこる中心が存在し自他の区別がある。その境は壁を作るように明確にするのではなく、いつも開かれた状態であることを表している。

数値化されたものがより現実的で信頼性の高いとする近代科学主義的錯覚から一旦距離を置き、内面に湧き起こる事実を尊重し、その体験を、実感を伴って表現しようとする時、三人称的方法では到達不可能なある種の真理が言葉として紡ぎ出される。このプロセスは、古代の哲学者が深い洞察と黙想によって人生の意味を探究した方法と類似している。

人間の精神世界には、通常の「コンセンサス意識」(Tart, 1975, 2016)とは異なる意識状態が存在し、そこから導き出される問いへの答えは、意識状態が異なるがゆえにそれ以前のものとは異質なものとなる。

卒業研究でコンテンプラティブ教育を導

入することの意義の一つには、それに取り組む学生が新しい認識の地平に意識が拓かれることがある。しかしそれは、日常場面で容易に実現するものではなく、過年度のコンテンプラティヴ実践と、大学生活の集大成としての卒業研究という真剣な取り組みの場であったが故に展開したように思われる。このような学生の変容の条件についてはさらなるデータの検討が必要である。

また、このような論文に触れる読者に対しては、人が到達し得る新たな認識の可能性と、それをベースとした課題解決方法の可能性を提示することができるという点で意義があると考えられる。マインドフルネスの目的と実践の成果には諸説があるが、このような体験はマインドフルネス瞑想の到達点の一例として提示できるであろう。

さらに、現代の意識研究の観点では、このような一人称的アプローチが、意識の本質の明確化に不可欠であるとされている。

チャールズ・タート (1972) は「状態特異的的科学」という概念を用いて、意識変容の結果として展開される固有の科学を定義している。つまり、現在の科学は通常の「コンセンサス意識」状態に対応する科学であり、瞑想などによる ASC (変性意識状態) においてはそれとは異なる固有の科学が存在することを主張している。

また、生物学者であり瞑想の実践家であるフランシスコ・ヴァレラ (1991) は、フッサールの考えに刺激を受け、認知科学と人間経験との統合を目指した。そして、「三昧／覚瞑想」の意識状態が、経験の本性を発見するための手段になり得ると考えた。本研究での事例はその具体例として捉えることができる。

このような一人称的アプローチは、報告可能な被験者が希少であり、理論的研究にデータが追いついていない現状がある。そこで、コンテンプラティヴ教育を応用した卒業研究でのデータは、心理学的実験場面とは異なる、日常場面における意識変容、

とりわけ意識が二元論的意識から飛躍する際の一人称的データとして、本研究領域では価値あるものとして位置づけられるであろう。

引用・参考文献

- J. Krishnamurti (1981). *Letters to the Schools* vol.1, Krishnamurti Foundation Trust.
- 加納友子・久野成実・藤田美紗都「高等教育におけるコンテンプラティヴ教育導入の意義に関する考察」『関西教育学会年報』通巻第44号 2020年、31-35頁.
- 加納友子・福原浩之・川崎裕太 (2020). 「高等教育におけるコンテンプラティヴ実践の意義に関する研究 -立命館大学教育人間学専攻のカリキュラムを中心に」 第11回統合人間学会
- Palmer, P. J. (1983). *To Know As We Are Known: Education as a Spiritual Journey*, Harper Collins Publishers.
- Tart, C. (1972). *States of Consciousness and State-Specific Sciences*, Science, 176, pp.1203-1210.
- Tart, C. (1975). *Transpersonal Psychology*, Harper & Row.
- Tart, C. (2016). *Meditation: Some kind of (self)-hypnosis? A deeper look*, A. Raz & M. Lifshitz (eds.) *Hypnosis and meditation, Towards an integrative science of conscious planes*, Oxford Univ. Press.
- Varela, F. (1991). *The Embodied Mind: Cognitive Science and Human Experience*. MIT press.

※本研究で取り上げた2事例は、卒業論文集内で公開されているものである。また、今回取り上げた卒業論文執筆者2名から、引用する許可を事前に得たうえで本稿に掲載した。